

# 総選挙投票日前日の 鉄っちゃん宰相

函館市医師会

みずせき きよし  
水関 清

首相の毎日は、分刻みであるらしい。それは、新聞各紙の表紙をめくってすぐのページの下あたりに、数段の枠をとって掲載される、前日の首相の動向を読むとよく分かる。そのような欄の名称は新聞ごとにさまざまで、日経であれば「首相官邸」であり、以下、朝日は「首相動静」、毎日「首相日々」、読売は「〇〇首相の一日」、となっている。

仕事場である官邸にいつ到着して、どのような方々と面会したか、そこを何時何分に出て、どこに向かったか、など、息詰まるほどの過密な日程をこなす日々が一変するのは、連日遊説に出かける選挙前である。先に行われたばかりの総選挙の際に首相は、飛行機（ときにはチャーター機）、新幹線、在来線、乗用車を駆使して、全国各地を巡っている。

自らが鉄道好きであることを公言している首相であり、その日程の随所に鉄道が組み込まれていることが、さまざまな想像をかき立てる。例えば、11月20日の首相動静を見ると、往路には全日空93便で大阪入りして用務をこなし、翌・21日の帰りは米原から「こだま748号」、名古屋で「のぞみ244号」に乗り継いでいる。さらにその翌日の22日の往路では、東京から「のぞみ121号」で名古屋入りし、復路は名古屋から「のぞみ246号」で東京へトンボ返りしている。激務の連続で疲れた身体を受け止めてくれる新幹線の座席は、首相にとって、構想を練って次に備える英気を養う、得難い場になっているのかもしれない。その一端がうかがえるのが、投票日前日にあたる26日の動静であった。この日の動きを、新聞記事から抜粋して再現してみたい。

「午前9時40分、東京・赤坂の衆院議員宿舎発。同9時56分、東京・市谷本村町の防衛省着。同10時52分、同所発。同53分、ホテルグランドヒル市ヶ谷着。同11時32分、同ホテル発。同11時48分、JR新宿駅着。正午、あずさ21号で同駅発。午後0時22分、JR立川駅着。同27分、同駅発。同1時1分、東京都小平市の西武新宿線小平駅南口着。街頭演説」

一連の行程において目を引くのは、市谷から小平への移動に中央線の特急列車を利用していることである。

都道302号などを經由すれば、両所間の距離は25kmほど、高速道路などを經由する場合にはこれが33kmとなる。土曜日の正午頃に、自動車でのこの区間を移動することを想定すれば、最短でおよそ1時間になると思われる。先ほどの動静のように、

新宿立川間を鉄道利用した場合の両所間の距離は32kmほどで、実際の移動に1時間29分を要している。交通渋滞や高速道路利用時の不測の事態を回避することを考えれば、所要時間が正確に読める鉄道を移動手段に採用したことは、頷ける部分が多い。

小平で47分滞在後の、この日のこれ以降のあわただしさを、演説会場間の距離と所要時間、そして演説時間をもとに振り返ってみる。まず、小平駅南口の次の京王線調布駅北口までの距離は13kmほどで、所要39分で34分演説。調布の次の東京・中野区役所前までは16kmほどで所要55分、31分演説。次の文京区礪川公園前の会場までは約10kmで、所要36分。26分演説して、5kmほど離れた四谷若葉東公園には14分で移動し、33分演説。さらに5kmほどの所のJR恵比寿駅西口までは、所要19分で、26分演説。ラストスパートがかかって、12kmほどの距離を所要23分で豊洲のホームセンターに移動して、この日最後の演説をして、1日の激務を締めくくっている。

緊張が連続し、目まぐるしく展開する日常の中でも、「鉄道」にふれあう中で流れる時間には、独特の“間”があるように思われる。それは、型にはまった日常から脱出して異質なものに触れたいという、人のところにひっそりと息づく、「旅」への希求と同質のものである。何らかの目的を果たすための移動手段に過ぎないと思われがちな鉄道とそれに乗る人との接点に、そうした独特の“間”が生まれる時、「鉄道」は、常にその人なりの味わいが生まれる存在になるのだと思われる。